

第34回 経営協議会議事要旨

日 時	場 所	欠 席 者	陪 席 者
平成24年1月17日(火)13時30分～	大学本部5階 第2会議室	学外委員 1名	教育改革担当副学長 情報担当副学長 財務・施設担当副学長 医学部附属病院長 常勤監事

1. 審議事項

(1) 香川大学学長選考会議委員の選出について

学長から、経営協議会学外委員から選出された学長選考会議委員が、9月末をもって任期が満了となったため、改めて学長選考会議委員を選出したい旨発言があった。

引き続き、学長から、審議資料1及び参考資料1～2に基づき審議した結果、天野委員、末松委員、竹崎委員、田中委員、天雲委員、常盤委員の6名を選出した。

(2) 中期計画の変更手続きについて

学長から、平成24年度から医学部の入学定員が増加することに伴い、中期計画を変更したので審議願いたい旨発言があった。

次いで、評価・社会連携担当理事から、審議資料2-1～2-2に基づき、中期計画の変更内容等について説明があり、審議の結果、原案を承認した。

(3) 新しい自己点検・評価制度について

学長から、現在実施している自己点検・評価に関する規程等について改善を行い、平成24年度から新しい自己点検・評価制度を実施することについて審議願いたい旨発言があった。

次いで、評価・社会連携担当理事から、審議資料3-1～3-2及び参考資料1～3に基づき、新しい自己点検・評価制度について説明があり、審議の結果、原案を承認した。

また、学外委員から、以下の質問があった。

自己点検・評価のPDCAサイクルとは具体的にどのような形で行うのか。

(回答) 各部局が各事業年度の実績等をデータ入力したものを、大学評価室でチェックし、各部局にフィードバックして、次年度に反映させていくような形を考えている。

(4) 平成24年度予算編成方針等について

学長から、平成24年度予算編成方針等について審議願いたい旨発言があった。

次いで、財務・施設担当副学長から、審議資料4-1～4-3に基づき、「第2期中期目標・中期計画期間における財務運営について」、「平成24年度予算編成の基本方針」及び「平成24年度全学予算編成基準」について説明があり、審議の結果、原案を承認した。

また、学外委員から、以下の質問があった。

①大学改革促進係数とは、どういうものなのか。また、それは学内予算にどう影響しているのか。

(回答) 法人化時には、「効率化係数」と呼ばれていたものが、平成22年度は「臨時的減額」、平成23年度からは「大学改革促進係数」となり形を変えて残っている。附属病院がない大学は△1%、附属病院がある大学で附属病院運営費交付金を受けていない大学は△1.3%、受けている大学は△1.6%の率で大学改革促進係数対象経費（一般運営費交付金対象事業費から標準教員数の人件費等を除く）を減額されている。（香川大学は△1.3%）減額分は、本学では、学部の基盤的経費に反映させている。

②運営費交付金等の大学運営に係る基盤的経費だけでなく、大学において重要な研究費である競争的資金等の外部資金（オーバーヘッドも含め）についても、ある程度翌年度の見込みを想定して、年度当初に方針をたてることも必要ではないか。

③運営費交付金等の大学運営に係る基盤的経費については、予算編成方針を定めているが、大学において重要な研究費である競争的資金等の外部資金については、議論されておらず、重点的な配分につながっていないのではないかと。また、大学全体の活力を示すには、外部資金を含めた大学の運営経費について外に見せることも重要ではないか。

2. 報告事項

(1) 平成24年度予算案の内示概要について

財務・施設担当副学長から、報告資料1-1～1-2に基づき、施設整備実施予定事業を含む平成24年度予算案の内示概要について報告があった。

3. その他報告事項

(1) 第1期中期目標期間評価の総括について

評価・社会連携担当理事から、資料1-1～1-2に基づき、第1期中期目標期間評価の総括について報告があった。

(2) 監事の監査報告について

常勤監事から、資料2に基づき、平成23年度において監事が行った業務監査及び会計監査について報告があった。

4. 大学を取り巻く最近の情勢について

・香川大学構想会議について

学長及び労務担当理事から、資料3-1～3-3に基づき、香川大学構想会議について報告があった。

また、学外委員から、以下の意見及び質問があった。

①財政状況等、大学をとりまく環境が非常に厳しくなっている現状の中で、国立大学法人に新しい資源投入は望めない。そういったときに考えられるのは、「学内再編」と「大学間連携」である。

学内再編は、人的資源を最大限有効に使い、学部、学科を再検討するしかない。ただ、シナ

ジー効果が期待できる再編でなければ意味がない。

新学部の設置を大学の起爆剤にするのであれば、斬新な構想でやらなければならない。

複数学部から、学生定員を出し合ったり教員定数を動かすだけの新学部設置では起爆剤とはならない。学内でよく検討して新しい理念で斬新な構想を検討して、シナジー効果の得るような再編を目指して欲しい。

また、大学間連携は、今後は避けられない。大学の規模を大きくすることはできない。小規模大学が競い合っていくのではなく、いかに連携、共同するかを考えていかなければならない。

②香川大学は、「四国唯一の総合大学」と言われるが、大学競争の中での生き残りを考える上で、総合大学であることがプラスになっているか。

学生の視点では、決してたくさん学部があった方が良いわけではない。期待するレベルの教育を受けられるか、また、社会のニーズにあう教育を受けて卒業できるかということのほうが重要なのではないか。一方、企業の視点では、何学部を卒業したかは関係なく、組織の中で活躍できる人材が欲しいだけである。大学、企業、学生視点で使われている「地域」という言葉の定義が必ずしも一致しているとは思えない。

受験生が、香川大学のロースクールの合格率、第1期の評価の順位を見たときに、香川大学を受験したいと思うか。そのような観点で見直すことも必要ではないか。

③「塊」になると、総力として力を出す。それにより自由度がでてくる。

例えば、ある財団の研究支援の基準は、特定の学会を指定し、全大学の論文投稿数の上位から採択し支援している。アクティビティは、数にも表れるのではないか。数がアクティビティをあげていく。

大学である分野で特徴を出していくためには、「数」も大事な要素である。今の現状では、1大学では、制限があるので、有効な連携が必要になってくる。

規模が小さくなると支援を受けるのが遅くなってしまうので、今後は「塊」を作っていく努力も必要ではないか。

また、優秀な教員を確保するためには、インセンティブを与える等の処遇の見直しも重要である。

④「中四国のリーディング大学をめざす」とあるが、具体的にどのような大学を目指しているのか。「中四国のリーディング大学」だけでは、香川大学の特徴になっていない。

もっと具体的な目標を掲げると分かりやすいし、次に具体的に何をすべきかが見えるのではないか。

閉会 15時15分